慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ふたたび動物の名前をめぐって |
| Sub Title | Réexamen des noms d'animaux |
| Author | 川口, 順二(Kawaguchi, Junji) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1999 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.362(123)- 376(109) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0376 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ふたたび動物の名前をめぐって

川口　順二

## 0．はじめに

本稿は動物の名が道具類の名称に転用される現象を考察した川口(1998)で提出したデータを補足し，記述概念を精密化することを目的とする[1]。まず第1節でデータを補足しながら再分類し，現象を確認する。次に第2節では動物名・道具名の表現の分析と分類を提出し，第3節で先稿で導入した共感の概念を踏まえながら，動物の名称から道具類の名称への転義を再検討する。

## 1．データの分類

### 1．1．動物の名前から道具類の名前へ

#### 1．1．1．「台架」

これはゴール語*andéos「若い雄牛」から派生語である仏 landier，英 andiron が「薪架（まきうま）」を，また「犬」と関わる英 fire-dog，仏 chenet，独 Bock「雄山羊，雄羊」を含む Feuerbock, Bratbock, Kaminbock も同様に「薪架」を指すことに注目したもので，日「馬」が地域語で「屋根の押え木」や「稲かけ」，「踏み台」を意味したり，仏 cheval「馬」から派生の chevalet，独 Esel「ロバ」(cf. 英 easel) がキャンヴァスを支える「画架」を意味するようになる類である。前回提出したデータに以下を加える。

○仏 bidet：「(ブルターニュ，ノルマンディー地方にいた) 小格乗馬」・「(建具屋などの職人が部品を支える) 万力，仕事台」・「ビデ」(SRDFJ)；

○仏 martinet：「アマツバメ」・「柄付き燭台，手燭」[2]；

○仏 perroquet：「オウム」・「外套掛け」，また「トグルンマスト：下から3番目の継ぎマスト」また「トゲンスル：トゲンスルに掛ける四角い帆」(SRDFJ)；

○仏 cacatois：「(帆船の) ロイヤル (スル)，最上檣帆：トゲンスルの上に張る帆」(SRDFJ) (cacatoès/cacatois「オウム」と同語で，上記 perroquet の上に張られることから) (DHLF)；

○仏 perruche：「インコ・オウム」・「[海事] ミズントガンスル：ミズンマストのトップスルの真上に張る帆」[3]。

1．1．2．「押したり突いたりする道具」

「落とし槌」の英 ram「雄羊」，英 monkey「猿」，独 Ramme，独 Bock，仏 mouton「羊」等。「破城槌」の羅 aries，仏 bélier，英 ram，独 Sturmbock 等。「破城槌」は1．1．5．に分類可能。

1．1．3．「台車」

「鉱山のトロッコ」を意味する独 Hund「犬」など。

1．1．4．「蛇口」

「羊」に関わる仏 robinet，「鶏」に関わる英 (water) cock，独 (Wasser) hahn。

1．1．5．「火器・武器」

これは前回提出しなかったのでリストアップする。

○仏 serpenteau：「小ヘビ，ヘビの子」・「蛇花火」～détonant「最後に爆発音を出す蛇花火」；

○英 salamander：「山椒魚」・「(各種の) 携帯用ストーブ (こんろ)」；Cf. 仏 salamandre「サンショウウオ」・「[商標] サラマンダー：暖炉の中に置く滞熱ストーブ」；Cf.「サラマンダー，火ヘビ，火イモリ：火の中にすむことができると信じられた伝説上の動物，特にトカゲまたはその他の爬虫類」(SREJD)；Cf. 独 Feuersalamander；

○仏 torpille，英 torpedo，独 Torpedo：「デンキナマズ，シビレエイ」・「魚雷」；

○英 musket，仏 mousquet，独 Muskete：「マスケット銃」<伊 mos-

chetto "arme à feu portable" (déb,XVIe s.) ← *mosca*「ハエ」(DHLF)。英 musket はまた「[鳥] コノリ：ハイタカの雄」の意味を持ち，falcon「ハヤブサ」が「(15-17世紀の) 軽砲」を，saker「鷹狩りに用いるハヤブサの一種」が「(旧式の) 軽野砲：半カルバリン砲 (demi-culverin) よりも小さく，発射する弾丸は 6 ポンド (約2.7kg) 以下」(SREJD) をも指すことを喚起 (KDEE)；

○仏 onagre，英 onager，独 onager：「ペルシャノロバ，オナガー」・「(古代ローマの) 投石機」。

1．1．6．「乗物」

これも先稿で出していないのでリストを掲げる。

○仏 mouette：「(小型の) カモメ」・「(1959) 救命用ゴムボート」(SRDFJ)，また「(複数形で形の類似から) 木製のアザミ抜き」(DHLF)；

○英 weasel：「イタチ」・「(主に米) (雪上用) ウィーゼル車」；

○英 pug：「パグ (愛玩用チンの一種) (pug(-)dog)」・「キツネ」・「(英) (操車用) 小型機関車」；

○英 hog：「(去勢した食用の雄) ブタ」・「[米俗] 大型オートバイ [車]」・「[米俗] 牽引用機関車」(OED)；

○英 cocle：「ザル貝」・「[文] 底の浅い小舟」；

○英 alligator：「アリゲーター」・「(米軍の) 水陸両用装軌車」・また「[冶金] ロール圧縮機 (alligator squeezer)」。

1．1．7．その他

先稿では仏 girafe，独 Giraffe が「キリン」と「[映画] 録音用のマイクを吊すための竿，(舞台用の) マイクロフォン」を，仏 chenille，独 Raupe，英 caterpillar が「芋虫，毛虫」と「カタピラー」を，仏 grue，独 Kranich，英 crane が「ツル」と「クレーン」を指すことを指摘しておいた。以下に補足例を挙げておく。

○仏 goret：「子豚 (=porcelet)」・「[海事] (木造船の船底を掃除する) 堅くて平たいかき箒」(SRDFJ)；

○英 hog：「(去勢した食用雄) ブタ」・「[舟底掃除用] 箒」；

○英 dolphin：「イルカ」・「大砲の把手」[4]・「係船柱；防舷用の杭；船側の防舷材」(SREJD)；○仏 dauphin：「イルカ」・「[建築] (堅樋下端の外側に曲がった) 樋口」；

○仏 cochonnet：「子豚」・「(ゲーム) (ペタンクの) 的球，ビュット」・「12面のサイコロ」・「[海事] (昔の木造船の) 檣頭の腕木」(SRDFJ)；

○仏 ourse：「雌熊」・「[海事] アンテナの下端を動かす索」；

○仏 serpent：「ヘビ」・「(1908) (航空) (気球の加工用) 誘導索 (= guide-rope)」・「[音楽] 17～19世紀中頃にもちいられたコルネット系のリップ・リード楽器」(SRDFJ)；

○仏 levrette：「グレーハウンドの雌」・「(1902) (複数の刃がついた) 石工用鉋」(SRDFJ)；

○仏 marmotte：「マーモット」・「(二重底の) 旅行用トランク (～de voyage)，(行商人の) 見本箱 (～de commis-voyageur)」(語源については DHLF 参照)；

○仏 pigeon：「ハト」・「[建築] (下地から仕上げまで手で塗る場合に用いる) 漆喰」・「[絵画] (額縁の四隅の留継を補強するための) 留め具」(SRDFJ)；

○仏 épervier：「ハイタカ」・「投げ網」；

○英 squab：「ひなバト」・「柔らかな厚いクッション」；

○英 slub：「ナメクジ」・「(鉄砲・空気銃などの玉として用いられる) 鉛玉，金属玉」・「[印刷] スラッグ」；

○英 worm：「ムシ」・「(蒸留器の) らせん管」・「ウォーム：シャフトの周囲に歯をらせん状に刻み，いも虫形をなすもの」(OED は他に「螺旋状をなす様々な道具・用具」として「ねじ山」，「ねじコンベア」その他を挙げる)；

○独 Schnecke：「巻き貝類の総称，特にカタツムリ」・「ウォーム」(DOBWDE)・「ねじコンベア」[5]・「渦巻きパン」；

○英 spider：「クモ」・「(米) フライパン」・「(かまどの上でなべなどを支

える）三脚台，ごとく」・「[機械] スパイダ：放射状の棒または腕が出ている部品；（自在継ぎ手の）十字軸」；○独 Spinne：「クモ」・「（4本以上の道路がそこから放射線状に出ている）集合点」；○仏 araignée：「クモ」・「（鉄製の）つるべ鈎」・「[石油] くも状フック：油井内の落器採揚器具」」・「[海事]（先が数本に分かれている）吊り索」・「[漁業] 刺し網」；

○独 Wanze：「ナンキンムシなど半翅類の昆虫」・「（俗）小型盗聴器」・「（戯）小型自動車」[6]。

1．2．道具類の名前から動物の名前へ

先稿では動物の名前が道具類の名前に転用されるケースが非常に多いのとは逆に，道具類の名前が動物の名前に転用されるケースがほとんど見あたらないことを指摘した。そして仏 crapaud「蟇蛙」がゲルマン語の *krappa「鈎」から出てくるという仮説（Cf. Rohlfs (1984): 46 sqq.）があることを見ておいたが，その後以下の例に気づいた。

まず仏 frégate はイタリア語からの借用（1525）で元来甲板のない軽速船を，ついで様々な船を指した（現在では「フリゲート船」）が，その速さから「軍艦鳥」の意味を持つようになった（1637）（SRDFJ）。英 frigate，独 Fregatte は船の意味で仏から借用するが，鳥では英 frigate-bird，独 Fregatttvogel と複合語である。

仏 oryx，英 oryx（独 Oryxantilope）は「オリックス：ウシ科オリックス属 Oryx の哺乳類の総称」（SRDFJ）だが，これは希 orux を借用した羅 oryx が語源で，orux は元来「つるはし」を意味していたが既に希でリビアやエジプトに生息する角が一本のレイヨウ antelope やインドの角4本のレイヨウなどの動物を指すようになっていた。DHLF は orux を「掘る，掘り出す」を意味する動詞 orussein による民衆語源解釈の影響を受けた土語だとする。

独 Stelze，英 stilt「アシナガサギ」はまた「竹馬」を意味する。仏 échasse もこの2つの意味を持つ。これは初め「義足」を指し，ここから「竹馬」の意が派生（13世紀），後に鳥の意味が現れる（18世紀）

(DHLF)。英 stilt は19世紀に鳥の意味が生じるが，OED はこの意味では stilt-plover の略形か，または独 Stelze の借用であるとする。DW は独 Stelze の鳥の意味について，これが古高地ドイツ語で既に現れる（Wasserstelze）のに対して「竹馬」は16世紀にしか出てこないので，語根 stel-t-から直接作られたとする。

次に仏 phaéton，英独 phaeton「熱帯鳥」で，はじめ御者を指したが（元来は希神話で太陽神の子，日輪を御すのに失敗，ゼウスに殺される），ここからある種の馬車を，そして1892年には無蓋自動車の１種を指すようになった。ビュフォンによると熱帯鳥が熱帯で太陽を運ぶ車に付いていくようにみえるのでリンネが phaéton と名づけたという（DHLF）[7]。

以上の例は「動物名→道具名」とは逆の「道具名→動物名」という方向に語義拡張・転義したものだが，oryx の方は語源が不確かだし，phaéton の方はかなり作為的につけられたもので，動物名としては必ずしもポピュラーなものでない。frégate や échasse は確実に「道具名→動物名」という拡張を示す数少ない反例として認める必要があるが，「道具名→動物名」という方向が稀であることは変わらない。

## ２．表現の分類

転義の方向性仮説の反例にはもう１類ある。動物名は新たな種類の導入または同定によって増加するが，在来種名に地名・人名・形態／色彩特性・特徴的行動などによる修飾を加える命名法が多い。例えば英 stilt-plover は形態特性を喚起する stilt を種名 plover に加えたもので，ここから plover を省略することができる。また仏 luth「(楽器) リュート」は「オサガメ」をも意味する。亀の意味では tortue-luth「亀＋リュート」という複合語もあるが，元来 luth と呼ばれていたものが tortue luth と明示的名称を得たのか，逆に元来 tortue-luth と曖昧さを排除した形があってそこから省略による単純形 luth が出てきたのかは定かでない。scie「鋸」・「ノコギリエイ」も同様で，動物名の時は複合語の poisson-scie「鋸＋魚」もある。luth や scie のような単純形の tortue luth や poisson-scie などの複合語との対応は，「道具名→動物名」（先稿参照）で見た

cock /watercock, Hahn/Wasserhahn, chien/chien de mine, ram/ battering ram のようなペアに見られる単純形／複合語の対応と平行している。

「道具名→動物名」／「動物名→道具名」というパラメータと，単純語／複雑語というパラメータを用いると次のような組み合わせが得られる。

1）「動物名→道具名」：

A）単純語：ウシ（「稲かけ」等），bélier；

B）複合語：コウモリ傘，Wasserhahn；

C）（複合語→）単純形：コウモリ，Hahn；

2）「道具名→動物名」：

A）単純語：オタマジャクシ，frégate；

B）複合語：スズムシ，カブトムシ，tortue-luth；

C）（複合語→）単純形：*スズ，?カブト，luth.

「単純語」／「複合語」の区別は自明だが，「（複合語→）単純形」とは複合語が存在していてその一部が省略された語形のことを指す。「スズムシ」のように省略がほぼ不可能なもの，「カブト」のように文脈の支えが無いと省略による単純形が出にくいもの，そして luth のように省略形が辞書に登録されるほどに独立度の高いものなどがある。

日本語では1）にしろ2）にしろ，単純語が少ないことが観察される。「動物名→道具名」で前稿でも引いた「ウシ」（「稲かけ」等），「ウマ」（「稲かけ」等），「ネコ」（「背負い篭」）の類は地方語（cf. SNMG）で残るものの極く限られていて，標準語での楽器の「コマ」などは例外的に見える。他方「道具名→動物名」では「オタマジャクシ」（以前は「ヒシャク」）と「クチナワ」が例外的に存在するものの（「クチナワ」は標準語ではもはや用いられない），他の例を探すことは容易ではあるまい。

日本語では単純語が少なく，複合語が多いのだが，それに加えて複合語に対応する単純形が少ないようである。以下に『和漢三才図会』の現代語訳から採った「道具名→動物名」の複合語の例をいくつか挙げておこう。

○箆鷺（へらさぎ）「長喙でその本は黄色，末は黒くて円く匙か箆のよう

である。それでこう名づけられる」

○障泥烏賊（あおりいか）「状（かたち）は障泥（あおり）（馬具の一種）に似ている」

○金鐘虫（すずむし）「声は鈴を振ったようで，里里林（りりりん），里里林と鳴く」

○くつわ虫「秋に鳴くが声は馬のくつわの音に似ている。そこでこう名づける」

○野槌蛇（のづちへび）「頭・尾は均等で尾は尖っていないので，柄のない槌に似ている。それで俗に野槌という」

最後の例では単純形の「ノヅチ」が許容されているが，他の名称では難しそうに見える。

### 3．転義のメカニズム

前節で語の類として単純語，複合語そしてその単純形を立てたが，ここで複合語を意味の観点から分類をつかさどる基底部分Rとその限定を行う修飾要素Qに分け，指示対象をZと呼ぼう。Rとは表現の意味する対象Zの範疇を示す要素で，例えば「コウモリ傘」はZが「傘」の1種であって「コウモリ」の1種ではないことから「傘」がRであることが分る。同様に tortue-luth「亀＋リュート」ではZが「亀」の1種で「リュート」の1種ではないので「亀」がRである。日英独の複合語は「スズムシ」のように「Q＋R」の語順で現れ，フランス語では tortue-luth のように「R＋Q」の語順となる。これらQとRから成る基本構造に対して，Wasserhahn（「水」＋「鶏」>）「蛇口」Zは「水」でも「鶏」でもないので，範疇を表すRが欠如していることになる。Wasserhahn または Hahn が1つのまとまりとして言語的には表現されない範疇Rに属す対象Zを示すわけで，このことで表現全体が転義的と考えられることになる。Wasserhahn や fire-dog が動物の Hahn や dog と異なることが Wasser-や fire-の部分で示されるとは言え，意味的な観点からはQ（Hahn）だけ（またはQ（Hahn）とQを更に修飾限定するP（Wasser））から成る表現と考えられる。このようなケースでも複合語から単純形を引き出すことができる

わけだが，R＋QからRを出すのと異なり，Q＋PからQを出しても範疇表示要素Rには辿り着かない。

「コウモリ傘」のように分類要素を伴う複合語と「オタマジャクシ」のように分類要素を伴わない単純語との関係はどのようなものだろうか？「ネズミ捕り」の「ネズミ」が動物そのものを（不特定的に）意味することは明らかだが，「コウモリ傘」の「コウモリ」Qはむしろ動物の視覚的印象の一面を喚起する機能を持つ反面それ以外の特徴は無視されて，これが動物以外の対象で「傘」Rの範疇に属するものZについて用いられる。Qが語義通りの意味とは異なる意味を持つとされる由縁である。なお「コウモリ」と省略されても背後に「コウモリ傘」が意識されるが，このようにQ＋Rの形が存在するここと自体は重要である。実際「コウモリ傘」という表現が消滅してしまい「コウモリ」しか存在しなくなれば，この語は単純語として登録され，この変化は直喩表現の隠喩表現への移行と解釈されよう。

Q＋Rの形は「Qの特性を（一部）持ったR，Qと比較できるようなR」(「コウモリ」と比べられる「傘」) という解釈を提出するが，Q（またはP＋Q）の形では「(Pの特性を（一部）持った／Pと関わりのある) Qの特性を持った」という解釈で，この表現の指示対象（またはそのクラス）Zは（P＋）Qの特性によってのみ再構築しなければならない。つまり（P＋）Qはアプリオリには様々な範疇領域の対象の持ち得る性質を示すわけで，解釈作業では性質を頼りに範疇を仮定し，表現主体の意図した範疇との一致を確認する必要が出てくるのである。範疇の同定についての仮定は構築であるが，表現主体の意図との一致の確認段階ではこれが再構築と見なされることになる。詩的表現ではこの確認作業がしばしば不可能で，構築の方が優先することから文学的効果が得られるのだと思われるが，ここで扱っている一般語のレヴェルでは再構築とは即ち言語行為の状況や文脈に矛盾しないことの確認において達成される。

以上動物名から離れた一般的考察を試みたが，これを動物名に当てはめるとどの様なことが言えるのだろうか？

日本語では1）「動物名→道具名」でも2）「道具名→動物名」でも単純語そして単純形さえも（状況に強く支えられない限り）稀であることを第2節で見た。これは日本語が直喩を好み，逆に隠喩を避ける傾向にあることを物語る。比喩表現それ自体は決して少なくないのだが，英仏独と比べると「（P＋）Q」よりも「Q＋R」の方が，少なくとも道具類の名称と動物の名称のやりとりの中ではずっと頻繁に見られるのである[8]。

「スズムシ」のようにQの省略が不可能な「Q＋R」型の表現でも転義が認められる。「スズムシ」・「マツムシ」・「クツワムシ」・「カブトムシ」等は「ムシ」Rを分類要素として共有しながらその下位分類項のZを名づけている。「ヤリイカ」・「アオリイカ」等も，「イカ」が分類体系の中で「ムシ」ほどの上位を占める語ではないとはいえ，同様の構造を示している[9]。

この「Q＋R」でのQは2つの機能を持つ。1つ目は対象の性質や関係するものを喚起するという機能で，Qの位置には道具（「眼鏡ザル」）の他に形状（「オオサンショウウオ」），色彩（「アオムシ」），部分（「ケムシ」），習性（「キノボリヘビ」），生息地（形）（「ノネズミ」，「イエウサギ」），地理（「テンジクネズミ」），動物（「ゾウガメ」），人（「ジェフロイクモザル」Ateles geoffroyi）などの名称が現れる。2つ目の機能は構造的機能としての弁別である。性質喚起の機能は命名の動機付けに対応するが，「アオリイカ」のように「アオリ」Qの語源が忘れられてもZがイカRの一種であり，しかも他の種のイカと対立することを示す弁別機能はQに存続する。「カブトムシ」が文脈によっては「カブト」と省略することが不可能でないのは，背後に「カブトムシ」を意識している，つまり他のQ＋Rと対立しつつムシRに分類されるという知識を背景に持っていることが関与的なのである[10]。この2つ目の機能が単純語と（複合語→）単純形とを区別している。

単純語では対象の性質Qが喚起されるだけで，それがどの類に属すのかが明示されない。例えば独 Esel をQとして耳にしたときには状況・文脈を手がかりに語が持つ様々な意味から「画架」Zを引き出さなければなら

ない。

前稿で述べたことだが，人が道具，より一般に人造物よりも動物の方により大きな共感[11]を覚えるならば，「動物名→道具名」という転義による意味拡張／変化がその逆の「道具名→動物名」よりも頻繁に起こることが予測される。道具の外形や機能を動物のそれに見立てることの方が，動物の外形や機能を道具のそれに見立てるよりも多く起こると考えるのである。

この予測は単純語に関して実際に確認されるわけだが，日「スズムシ」，仏 poisson-épée・英 swordfish・独 Schwertfisch「メカジキ」のような複合語を「道具名→動物名」の例とすれば，数多くの反例を認めることになる。

しかしながら，上で「道具名→動物名」のケースはしばしば複合語または複合語から得られた単純形であること見てきた。動物への共感度が道具類への共感度よりも高いことを１つのパラメータとして認めておいて，もう１つのパラメータとして範疇表現Ｒが介在するか否かを導入してみよう。範疇表現介在のパラメータは日本語では非常に重要で，ＲなしのＱはＺの同定を困難にする。したがって「動物名→道具名」でも「道具名→動物名」でも，Ｑ＋Ｒが標準的な表現となる。その結果として動物共感度パラメータが漠然としてしまう。というのもこのパラメータはＺがＱで表現されるときに最も明瞭に現れるもので，Ｑ＋Ｒ表現ではＺ再構築がＲによってほぼ自動的に決定されてしまうからである。

英独仏などでは言語ごとのある程度の揺れはあるものの，共感パラメータの方が重要で，ＺをＱだけで表現したり，Ｑ＋Ｒ表現をＱに還元されていく傾向を持つ[12]。Ｒの非表示によってＺ再構築を聞き手に任せるので，動物のＱと対象の道具類であるＺとの間に方向性が生まれてくるのである。

## ４．結語

本稿では「動物名→道具名」の転義について先稿で見たデータを補足して転義の方向性仮説を確認したあと，日本語での動物名の検討から，動物

名から道具名への転義について先稿で提出した共感のパラメータに加えて範疇表現介在のパラメータを導入した。2つのパラメータが競合し，言語習慣がいずれかを優先させる，という考えである。この仮説の検証のためには動物名・道具名の領域に限ることなく，より広く転義の現象を考察していくことが必要になろう。

**注**

（1） 本稿の作成に先だってフランス語学勉強会（於慶応大三田，12/12/'98）およびフランス語学会（於慶応大日吉，29/5/'99）での発表の機会を得，参加者諸氏から種々ご意見を頂き，特に大久保朝憲氏からは私信で重要な問題提起を，また川口（1998）に対して鈴木孝夫氏から私信で日本語についてのご比判と詳細な情報を，そしてI. Tamba氏からは色々な示唆の他にも文献をご教示頂いた。諸氏に深く感謝の意を表したい。なお，川口（1998）で見過ごしていた重要な文献にRohlfs（1925, 1926, 1975, 1984）及びAlvar（1953）がある。特にRohlfsはロマンス諸語やそれ以外の諸言語への言及があるが，あくまで語源研究が目的で動物名と道具類名間の方向性は問題にしていないので観点が異なる。Rohlfs（1925）ではイタリア語zappa「鍬」の語源を羊を呼ぶ擬声語から出た羊を指す語だと説き，同様の現象を様々な言語で見いだす。またRohlfs（1975）は「雌ブタ」など雌の家畜名が「ナット」を，「雄ブタ」など雄の家畜名が「ビス」を示すことと類似現象を多数挙げ，雄／雌のイメージが道具類のイメージと重なることを示した。転義の動機としてこのような要因が働くことがあるのは否定できず，人間の象徴作用に根差すこのような現象は興味深い。彼の提出する豊富なデータに関しては再録を避けるので是非原典にあたって頂きたい。なおAlvarが言及する諸論文は入手できていないので議論を差し控えざるを得ない。また人間と動物との関わりについてはWillis（1993），Shanklin（1985），国立歴史民俗博物館編（1997）など参照。

（2） martinetには「（数本の革紐のついた）鞭」・「［鉱山］大理石加工用砥石」・「［金属］ティルトハンマー。（鍛造用重錘式の）ドロップハンマー」・「［海事］ピークペンダント」などの語義があるが，「アマツバメ」や「柄付き燭台」との語源関係は明瞭でない。

（3） U. Ecoの*L'isola del giorno prima*で主人公Robertoの日誌からの物語の再構成について，語り手が日誌での船の部位の語彙の不確かさを

指摘する部分が第1章にある：[Roberto] parla di parrocchetto, che per noi è una vela di trinchetto, ma siccome per i francesi *perruche* è la vela di belvedere che sta sull'albero di mezzana, non si sa a cosa alluda quando dice che stava sotto alla parrucchetta. 仏訳：il parle de perroquet, qui, pour nous, est une voile de misaine, mais comme pour les Français *perruche* est l'italienne voile de *belvedere* qui est sur le mât d'artimon, on ne sait pas à quoi il fait allusion quand il dit se trouver sous la perruquette.

(4) "In early artillery, each of two handles cast solid on a cannon nearly over the trunnions, commonly made in the conventional form of a dolphin" (OED). ドイツ語でも同様："die handhaben bei kanonen und mösern, denen man die gestalt eines delphinus zugeben pflegt" (DW)。ギリシャ語の delphis は「敵船を沈めるために投げつける鉄塊」(DHLF) をもさすので1．1．5．に分類できる。

(5) 英語での環形動物との類似による螺旋状ネジ山の命名は理解しやすい。独 Wurm は worm に対応し「ムシ」を指すが，ウォームをも意味した ("schraube ohne ende" (DW), cf. 仏 vis sans fin (DOBWDF))。独語では Schnecke が貝やカタツムリの殻の巻きによる。

(6) 仏 criquet「バッタ」は「[古，俗] 安ワイン」をも指すので「道具類」と言うよりも「人造物」artefact としてまとめるべきだろう。

(7) 仏 souche「切り株」は道具類とは言えないが人造物 artefact とみなすならば，嘴の幅の広さが顕著な souchet「ハシビロガモ（語源は不確実だが souche からの派生に見える）」もここに分類できる。souchet はまた canard bec large とか canard cuiller「サジ＋カモ」(cf. 独 Löffelente，英 shoveler) とも呼ばれる。なおまた仏 crécerelle「チョウゲンボウ」は crécelle「(元来は宗教的・呪術的目的を持った) (玩具) ガラガラ」からの派生語だが，この鳥の鳴き声がガラガラの立てる音に似ていることからの命名とされる (DHLE) のでここに分類されよう。

(8) この問題については大久保朝憲氏から私信で示唆を頂いた。なお，動物名を人に当てる語法は日本語でも発達してはいるが，「あのブタ野郎がまた汚いまねをした」という罵倒表現の方が「あのブタがまた汚いまねをした」よりも自然に感じられる。また「あのブタ野郎の太郎が云々」は良いが，「あのブタの太郎が云々」は言いにくいのではないだろうか？　さらに「幕府のイヌ」とは言えても，「おい，そこのイヌ野郎／？そこのイヌ」では違いが出てくるようである。Cf. "Ce cochon, il m'a encore fait un sale coup" / "Ce cochon de Pierre..." ; "Hé, le

cochon là/ ?? le cochon de type (qui est) là".

(9) Berlin (1992) は民俗生物学での動植物名の構造を記述している (cf.: 33-35) が,「ムシ」の例は彼の1次的名称に,「イカ」の例は2次的名称に対応する。なお民俗生物学については Medin & Atran (eds.) の諸論文参照。

(10)「クワガタ (ムシ)」の下位種が「クワガタ」との複合語で示される場合,「ミヤマクワガタ」・「ノコギリクワガタ」・「スジクワガタ」のように普通「ムシ」を付けないが,「オサムシ」が「クロナガオサムシ」・「アオオサムシ」など「ムシ」を保持するものもある。

(11) 共感 empathy は様々な文法事象に現れるが, ここで問題になっている語彙段階での規定はいささか曖昧である。人間>動物 (または高等動物>下等動物)>植物>無生物の序列が人間にとっての共感度の度合いを表す, というような考え方は, 文化・歴史の中での人間の様々な対象との関わりを規定するには余りに単純である。例えば人に良く知られた動物の多くはその名前が人の形容に用いられる (太郎のことを「ブタ野郎」と呼ぶ) がその逆 (ブタを指して喧嘩相手のことを頭に浮かべながら*「あの太郎の奴」) は極く少ない。しかしこれをもって動物の方が人間に対してよりも共感度が高いとは言うことには意味がない。この場合は動物種 (「ブタ」) に顕著な性質 (「汚さ」) を個人 (「太郎」) に当てることが文化の中で慣用化している。人の個人名をある1匹の動物に与えたり, ある種の動物全体に当てるようなケースもあるが, 共同体の文化では説明ができないのである。固有名詞と種名については Lévi-Strauss (1962), 出口 (1995) 参照。

(12) Q+R で Q が先行するのか R が先行するのかということも Q への還元と関わっている可能性がある。

**[辞書]** (川口 (1998) への追加)

DOBWDE: Duden Oxford Bildwörterbuch Deutsch und Englisch.

DOBWDF: Duden Oxford Bildwörterbuch Deutsch und Französisch.

KDEE: 『英語語源辞典』(研究社)。

SNMG: 『改訂　総合日本民俗語彙』(平凡社)。

**[文献]** (川口 (1998) への追加)

Alvar, M. (1953): reseña de: Beihauer (1949): *Tiernamen, ZRPh* 69.

Berlin, B. (1992): *Ethnobiological Classification: Principles of Categorization of Plants and Animals in Traditional Societies*, Princeton, Princeton University Press.

出口顕 (1995):『名前のアルケオロジー』, 紀伊国屋。

川口順二（1998）：「動物名から道具名へ―メトニミ・メタファ・意味の変化―」，『芸文研究』75。
国立歴史民俗博物館編（1997）：『動物と人間の文化誌』，吉川弘文館。
Lévi-Strauss, C. (1962) : *La pensée sauvage*, Paris, Plon.
Medin, D. & S. Atran (eds.) (1999) : *Folkbiology*, Cambridge, The MIT Press.
Rohlfs, G. (1925) : "Über Hacken und Böcke", *ZRPh* 45.
Rohlfs, G. (1926) : "Lockrufe und Wortschöpfungen. Zu den Namen von Ente und Gans", *ZFSL* 49.
Rohlfs, G. (1979) : *Estudios sobre el léxico románico*, Réelaboración parcial y notas de M. Alvar, Ed. conjunta, revisada y aumentada, Madrid, Gredos.
Rohlfs, G. (1984): *Von Rom zur Romania. Aspekte und Probleme romanischer Sprachgeschichte,* Tübingen, Guntar Narr Verlag.
Shanklin, E. (1985) : "Sustenance and Symbol : Anthropological Studies of Domesticated Animals", *Annual Review of Anthropology* 14.
寺島良安著，島田勇雄他訳注（1986, 87）：『和漢三才図会』，平凡社。
Willis, R. (ed.) (1993) : *Signifying Animals : Human Meaning in the Natural World*, London, Unwin Hyman.